

他者を語ること

問われる「まなざし」

▶ 1

私たちが「他者」を見る目はどのように変わってきたのか。米国を中心に人種主義や差別について研究してきた京都大名誉教授の竹沢泰子さんに、文化人類学が模索してきた「人間の見方」について聞いた。

— 人類学の歩みは。

「かつて欧米の人類学者は自分以外の社会や先住民を客観的に研究しようとしませんでした。ただ相手との関係は対等ではなかった。植民地支配のための道具として生まれた過去もあります。20世紀には人種主義を否定し、文化に優劣はないとの考えが強まりました。一方で相手を特定の『文化の型』に当てはめる単純化も起きた。日本人を論じた『菊と刀』が例です」

「その後、植民地主義への批判やフェミニズムを通じ、それまで語られる側だった少数者の視点が入ってきた。また研究の客観性についても問い直された。今は相手と

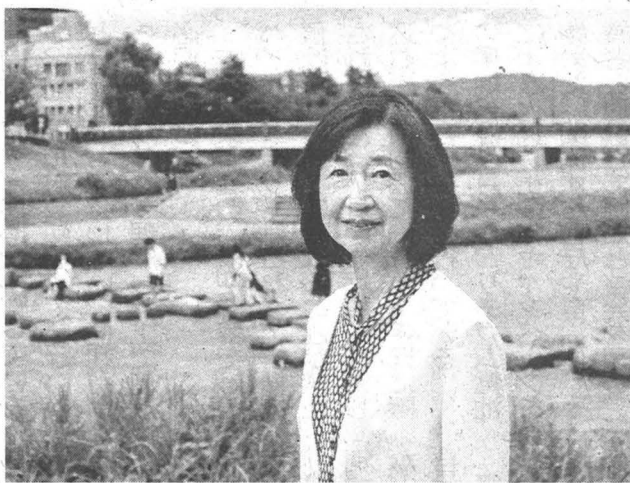
竹沢泰子・京大名誉教授に聞く

多様な社会が前に進む

の関係や自らの立場、権力性を意識して『語る』ことが求められています」

— 文化とは何か。

「何か実体があるように思われることも



たけざわ・やすこ 1957年、兵庫県生まれ。米ワシントン大院修了。京都大教授などを経て2023年から同名誉教授、関西外国語大・国際文化研究所長。著書に「アメリカの人種主義」など。

ありますが、決して不変のものではなく、誰かの『語り』によって生み出されるものです。最近では人々の手でつくられていくプロセスとして捉えられるようになりました。一方で文化は少数民族のアイデンティティの源です。かつて同化政策によって言語や生活様式まで奪われた人たちが、心のままで侵略され、多数派の価値観に組み込まれてしまわないように抵抗する。そうした思いを尊重することが必要です」

「国家はメディアと教育でナショナルリズムを高揚させて『自分たち』と『他者』を強力につくり出します。例えば『大和民族』という言葉が地理の教科書に定着していくのは日清戦争と日露戦争の間です。植民地を抱えて自分たちと周辺の人との違いを際立たせることが必要になった。文化や差別をめぐる言葉の背景には権力関係があります」

— 排外主義について。

「フランスの哲学者クリステヴァは、私たちが自己の内に抱えながら払拭したい他者を『外国人』に投影していると指摘しました。米国では移民を次々と逮捕するトランプ政権と抗議する人との間で分断が深ま

っています。日本でも十分な根拠なく外国人を危険視し、排除する動きが高まっています。こうした排外主義は外国にルーツを持ちながら日本に住む人たちの心を深く傷つけます。排除の矛先は体が不自由な人や性的少数者、高齢者に広がるかもしれません。誰もが生きつらい社会となるでしょう」

「今の社会は『日本人』『外国人』という二分法ではとらえきれない多様な人々で構成されています。むしろ少数者やそれを支援する人たちの声によって成熟してきたと言える。多様な人々がいるからこそ、新しい工夫や発想、価値観が生まれ、社会は前進することができるのです」

◆ 「あの人はみんなと違うから……」。私たちは「他者」について語ることが好きだ。でもそれは自分の正体をさらけ出すことでもある。本人も気がつかない「差別的まなざし」が姿を見せることも。ヘイトや偏見があふれる今、自分自身を見つめ直し、人との関係や世界のありようをどうとらえたいかを探る。

（共同通信編集委員・吉村敬介）

川 随時掲載

他者を語ること

問われる「まなざし」

▶ 2

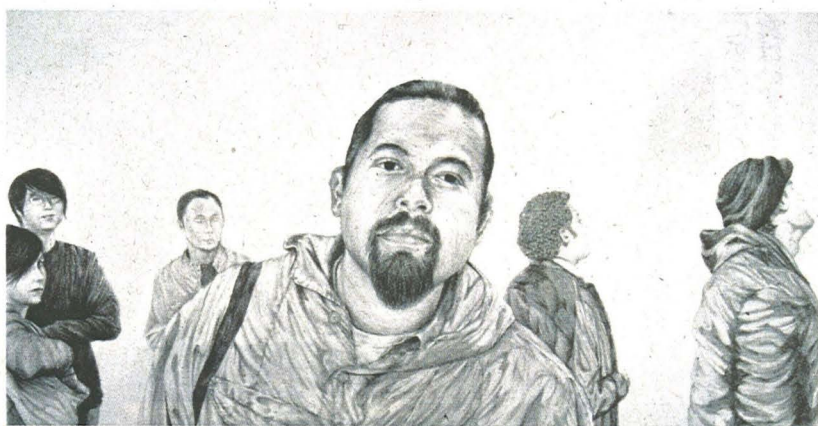
少し身を乗り出して男性がこちらを見つめている。背景にはそれぞれ別の方向を眺める人たち。どこかのギャラリーのようだ。男性は壁にかけられた作品を鑑賞しているのだ。どんな作品を見ているのだろう。それとも見られているのは「私たち」なのだろうか。

▽多様なルーツ

米ロサンゼルス在住の女性アーティスト、シズ・サルダマンドさんの作品「アーノルド、アートを見る#2」は、見る者に「めまい」に似た感覚を抱かせる。

気づくのは典型的な白人が見当たらないこと。主人公はおそらくメキシコ系。アジア系やアフリカ系とおぼしき人もいる。移民が多い米西海岸の映し鏡のようでもある。シズさんがこの絵を描いたのは約20年前。美術を学んでいたカリフォルニア大口

問いかける「逆転の視線」



シズ・サルダマンドさんの作品「アーノルド、アートを見る#2」
(シズさん提供)

サンゼルス校で、教師から「君の作品には問題がある」と言われたのがきっかけだった。母は日系、父はメキシコ系の米国人。多様

なルーツを持つ人たちに囲まれて育ち、身近な友人たちを好んで描くようになった。音楽やアートなどサブカルチャーで活躍する人が多い。時にリラックスし、時に毅然とした表情でこちらを見つめる。社会の周りで誇りを持って生きている。そんな共感が伝わってくる。

でも学校では「アジア系やメキシコ系の人物を描いた作品は売れない」と言われた。白人の買い手が自宅の居間に飾る絵ではないとの理由だ。

『ブラウン(肌の色が濃い人)』にもアートで自己表現し、美術館を訪れる人はたくさんいる。『芸術は白人のものだ』という先入観に、作品を通じて挑戦したかった。シズさんは友人のアーノルドにポーズを取ってもらい、キャンバスにボールペンで「アートを見る」を描いた。ボールペンを使うのは監獄に収監されたメキシコ系の人たちが手近な画材で自己表現したスタイルへのオマージュだ。

▽逆境でも誇り

シズさんの作品を研究で取り上げた文化

人類学者で京都大名誉教授の竹沢泰子さんは指摘する。「それまで権力によって他者化され、差別のまなざしにさらされていた人が、逆に『見る』側に転じる。権力構造がひっくり返り、他者として見られたことがない者の心に違和感を呼び起こす。巧妙な仕掛けだ。竹沢さんは「シズさんは生まれながらの属性で自分をカテゴライズされることへの反発がある」と語る。

「日本でも『ハーフ』と呼ばれる人たちが他者のまなざしにさらされてきた」と竹沢さん。「かわいい」「かつこい」と無邪気に言われて疎外感を抱く人もいる。「安易に他者化することの暴力性について考えてほしい」と話す。

米国ではトランプ政権による移民排斥の動きが続く。「この国は先住民や移民を犠牲にしてつくられたが、それが再び日常化している。イスラエルのガザ攻撃に反対を表明したことで私の作品も以前より売れなくなった」とシズさん。「でも望みは持っている。逆境でも誇り高く生きる仲間を描き続けたい。顔も知らない買い手のためでなく、そこにいる仲間たちのために」――随時掲載